On the Liu Zhao Regime—Yi Zhou, Guan Zhong and Hexi Corridor During the Han-Wei Transition

Takashi Mitsuda

During the Han-Wei transition, it is at least certain that the Liu Zhao Regime maintained a defensive stance and took over the inside of Yi Zhou after his Regime contained the insurrection of Zhou Wei and the conflict with Liu Biao until around 200 CE.

From 200 CE, his Regime enjoyed a period of relative stability and limited battles in the Ba Gun for control by the Zhou Lu Regime.

Given that Cao Cao won the battle of the Guan Du in 200 CE, gained control over all of He Bei and achieved dominance over the Cao Cao Regime, the Liu Zhao Regime was able to reign over Yi Zhou while monitoring more closely than ever Sun Quan, Liu Biao, Liu Bei, the residing forces of the Hexi Corridor and the Guan Zhong, while alsofighting a difficult battle with Zhou Lu. Eventually, the Liu Zhao Regime was surrounded by Liu Bei so that Liu Zhao had to bring external support into the Yi Zhou in order to fight against Zhou Lu and Cao Cao.

According to statements in the *"Sanguozhi"* and other history books, there were few good evaluations of Liu Zhao. One explanation for this is that the persons with opinions about Liu Zhao were those who had defeated the Liu Zhao Regime. The descriptions available in the extant history books expressed a low opinion of Liu Zhao in order to thereby evaluate the Shu Han and the Sun Wu Regimes more highly. Drawing on Liu Zhao's opinions recorded in the history books, the present writer attaches importance to the description in the *"Lun"* of the *"Hou Han Shu" Liu Yan chuan*.

劉璋政権について
—漢魏交替期の益州と関中・河西回廊

満　田　　剛

はじめに
１．劉璋政権年代記
２．『三國志』及び裴松之注所引書籍における劉璋評
おわり

はじめに

劉璋については、諸葛亮がいわゆる「隆中対」（『三國志』巻三十五〔以下、『三國志』及び同裴松之注からの引用は書名・巻数省略〕諸葛亮伝）で述べているように「闇弱」であった[1)]ため、父・劉焉から受け継いだ益州を劉備に奪われた、と考えられていることが多いようである[2)]。

しかし、『三國志』などの史書では、当然ながら劉璋および彼の政権を倒した側からの視点で書かれていることも踏まえて考えなければならない。

さらに、拙稿「劉表政権について—漢魏交替期の荊州と交州」（『創価大学人文論集』 2008年）（以下、「拙稿１」と略す）でも述べたように、紀伝体である正史では特定の人物・事件・政権に関する記事が分散して記載されており、特に『三國志』の場合はそれに加えて魏・蜀漢・呉という国家ごとの三部構成であることにも注意が必要である。それ故、史書にある劉璋及び劉璋政権に関する記事を年代記として整理し直し、全体的、通史的に分析しなければ、劉璋及び彼の政権を正確に把握できないと考えるが、先行研究においてそこまでの作業がな

されていたとは言い切れない。

また、これも拙稿１で述べたことだが、地方は三国各国（最終的には西晋）の形成の背景として語られてしまうことが多く、漢魏交替期の各地方政権の絡み合いの歴史が単純化され、各政権の動向が他の政権の動向と不可分に結びついていたことも軽視される傾向が見受けられる。

そこで本論文ではできる限り劉璋を主語とし、益州を地理的中心とした漢魏交替期の各地方政権の絡み合いの政治史を網羅的に整理しつつ、劉璋政権の確立と崩壊の過程を年代記として構成し直すことに取り組む。その上で、統治者として劉璋の人物像の見直しをしつつ、地方や辺境から見た漢魏交替期の歴史を少しでも明らかにしたいと考えている。

１．劉璋政権年代記

初平３年10月頃、劉璋は奉車都尉として、兄の劉範・劉誕とともに献帝にしたがって長安にいた[3)]。劉焉伝裴松之注（以下、「裴注」と略す）所引『英雄記』によると、劉焉は董卓から命じられた人夫・物資の徴発を出さなかったため、劉璋らは鎖につながれ郿塢の陰獄に閉じ込められている[4)]。

そんな中、劉焉伝本文では、劉焉が野心を露わにしているとの趣旨の劉表の上表を受けて、献帝が劉璋を遣わして劉焉をたしなめようとした[5)]が、劉焉は劉璋を手元に留めたとある。ただ、劉焉伝裴注所引『英雄記』では劉焉が病気だとして劉璋を呼び、劉璋が自ら上表して劉焉を見舞ったところ、劉焉が劉璋を都に返さなかったとされ、経緯が異なる。加えて、この時の長安での政権担当者は李傕・郭汜・樊稠・張済らということも確認しておきたい。

この頃（興平元年３月）、劉焉は劉範や馬騰・韓遂らとともに李傕らを誅殺しようとして失敗[6)]し、劉範は殺され、劉誕も処刑。劉焉と先祖以来のつながりがある議郎の龐羲（河南の人）が劉焉の孫らを連れて益州に入った[7)]。

同年、劉焉が亡くなると、州の大吏の趙韙らは劉璋が温厚なため、自分たちに都合がよいと考え、共同で劉璋を益州刺史とするように上書すると詔勅が下り、劉璋が監軍使者・領益州牧に、趙韙が征東中郎将に任命され、劉表討伐が

命じられたという[8)]。

ただ、劉焉伝裴注所引『英雄記』によると、劉焉が亡くなり劉璋が益州刺史となるも、李傕・郭汜らが首班である長安の朝廷では潁川の扈瑁を刺史として漢中に入らせたとされるが、その後はよくわからない。その際、荊州別駕の劉闔や劉璋配下の沈弥、婁発、甘寧が叛いて劉璋と戦ったが勝つことができず荊州に逃げていき、劉璋は趙韙に荊州を攻撃させて**朐**䏰に駐屯させたとある。また、『後漢書』列伝巻六十五劉焉伝（以下、巻数省略）では、以前に劉焉が乗輿の器服を僭擬したと劉表が上奏したことを受けて、趙韙が劉表に備えて**朐**䏰に駐屯したとある[9)]。

『後漢書』劉焉伝によると、張魯は劉璋が「闇懦」だとして従わなかったので、（『華陽國志』巻二漢中志〔以下、初出以外巻数省略〕によると建安５年に）劉璋は張魯の母と弟を殺し、漢中の張魯と対立したとされ、『華陽國志』巻五公孫述劉二牧志及び漢中志ではこの時点で巴夷の杜濩・朴胡・袁約らが劉璋に叛いて張魯についたとされる[10)]。

その後、劉璋は龐羲らを派遣して張魯を攻撃したがたびたび敗れ、巴人も叛いた。張魯の部曲の多くが巴西にいたこともあって、龐羲を巴西太守とし、龐羲は閬中に駐屯して漢昌の賨の民を召して兵とし、張魯を防いだ[11)]。楊戯伝附『季漢輔臣賛』の程畿の賛に附された文章にも、漢昌県に賨人（板楯蛮）[12)]が多く存在していたとある[13)]。張魯の巴西の部曲の主力が賨人であったと考えられており[14)]、先述の杜濩・朴胡は賨人である蓋然性が高い[15)]。

加えて、劉璋伝裴注所引『英雄記』では、龐羲と劉璋は親しく、劉璋の子が難を免れたのは彼のおかげであり、それ故に巴西太守となって権勢をふるったと記されている。その後、『後漢書』劉焉伝によると、張魯が龐羲の統治する巴郡を奪取し、巴漢に雄飛したとされる。

このように見ると、張魯も、龐羲などの劉璋配下の人々も、重要な軍事力として賨人（板楯蛮）を位置付けており、この後も劉璋・龐羲と張魯がこの巴西をめぐって争い続けたものと思われ、龐羲は張魯との戦いの最前線に置かれていたことになる。

楊戯伝附『季漢輔臣贊』の程畿の贊に附された一文では、龐羲が叛こうとしていると劉璋に讒言したものがあり、劉璋は龐羲を疑い、龐羲もそれを聞いて守りを固めようとしたとされる[16]。『華陽國志』公孫述劉二牧志にも

> 璋怒，殺魯母弟，遣和德中郎將龐羲討魯。不克。巴人日叛。乃以羲爲巴郡太守，屯閬中禦魯。羲以宜須兵衛，輒召漢昌賓民爲兵。或構羲於璋，璋與之情好攜隙。趙韙數進諫，不從，亦恚恨也。建安五年，趙韙起兵數萬，將以攻璋。璋逆擊之。明年，韙破敗。羲懼，遣吏程郁宣旨於郁父漢昌令畿，索益賓兵。

とあるように、劉璋に龐羲を讒言したため劉璋と龐羲の関係にひびが入ったとの記述のあとに、趙韙がしばしば劉璋を諫めたが、劉璋は従わず、趙韙は恨んだとある。この文章の流れからすれば、趙韙は劉璋と龐羲の間の関係改善を図ったようにも受け取れる。この見方が正しければ、益州人士の趙韙が非益州人士の龐羲を「援助」したということになり、益州人士と非益州人士でも共通の利害関係などから協力することもあった[17]ことが指摘できる。

龐羲と彼が赴任した巴西郡については、『晋書』巻十四志第四地理上益州・梁州によると、劉璋が巴郡を分けて永寧郡を立て（興平元年？）、建安６年に永寧郡を巴東郡に、巴郡墊江以北を分けて巴西郡を置き、涪陵郡を立てたとされるが、この行政区域改変については、趙韙の反乱や龐羲の動き、そして張魯の巴への進出などに対応したものだと思われる。

先主伝裴注所引『三輔決録』注には、献帝の初めに、射堅と弟の射援が劉璋を頼り、劉璋は射堅を登用したとされる。

袁術が亡くなる直前の建安４年６月頃、孫討逆伝裴注所引『江表伝』によると、詔勅を受けて孫策が曹操・董承・劉璋らと協同して袁術と劉表の討伐にあたることになった。加えて、衛覬伝によると、曹操は劉璋に劉表を牽制させようとし、衛覬を使者として派遣したが、長安から先に行けず、未遂に終わっている[18]。『江表伝』については信憑性の問題がないわけではないが、この衛覬伝の記事も考慮すれば、同じような動きがあった蓋然性は高いだろう。

そんな中、建安５年に趙韙が数万の兵を率いて劉璋を攻撃したが、『華陽国志』

公孫述劉二牧志によると、劉璋も東州兵[19]の活躍で反撃し、翌年には趙韙の配下の龐楽・李異の寝返りもあって、趙韙を撃破している。この挙兵に際して、劉璋伝裴注所引『英雄記』によると、趙韙が劉表に厚い賂を贈って和睦を要請したとされるが、それに対する劉表側の動きはよくわからない[20]。

先述のように劉璋が張魯の母と弟を殺害したのが建安５年であることからすれば、澤章敏氏が述べるように、この趙韙の乱が発生した中で張魯が劉璋からの自立を図ったということであろう[21]。

劉璋伝裴注所引『漢獻帝春秋』によると、この叛乱を知った（曹操を中心とする）朝廷では五官中郎將の牛亶を新たな益州刺史として派遣し、劉璋を呼びよせて卿にしようとしたとある。『獻帝春秋』については、裴松之も信憑性を疑うほどの史書であるので注意が必要であるが、曹操が掌握する朝廷がこの機に益州を支配下に置こうと考えたとしてもおかしくはない。また、この話を信じれば、劉璋は強い意志を持って政権維持を図ったということになろう。

ここまでの経緯を踏まえると、趙韙の叛乱の際、劉璋は劉表・曹操や張魯、そして龐羲の動向を睨みながら戦うという苦境にあったが、何とか叛乱を鎮圧したということになる。

この趙韙による叛乱の経緯を見ていたであろう龐羲は劉璋を懼れ、配下の程郁をその父である漢昌の令・程畿のところに派遣し、賓兵を集めさせようとした。しかし、程畿から拒絶され、さらに程郁の命を楯に脅しても程畿が折れなかったため、龐羲は劉璋に謝罪し、劉璋は程畿を高く評価して江陽太守にしたとされる[22]。

ちなみに、劉璋が用いた人物[23]の中には、呉懿や来敏、費観、費伯仁、費禕のように劉璋との血縁関係があるものもいる。呉懿は父と劉焉が親しく、妹が劉璋の兄・劉瑁の妻であった[24]。来敏は姉の夫の黄琬が劉璋の祖母の甥だったので、劉璋は黄琬の妻を迎え、来敏もそれに伴って蜀に入り、劉璋の賓客となったとされる[25]。費禕は幼い頃に父を失い、族父の費伯仁のもとに身を寄せたが、その費伯仁のおばが劉璋の母であり、劉璋は使者を派遣して費伯仁を迎え、費伯仁は費禕を連れて入蜀し遊学したとされる[26]。加えて、劉璋の母は費観のお

ばでもあり、劉璋も娘を費観に娶らせている[27]。

また、許靖伝によると、劉璋が「交州」[28]に使者を派遣して許靖を招いたため、許靖は蜀に入り、劉璋は許靖を巴郡や廣漢の太守とし、建安16年に蜀郡太守に転任させたとされる。また、建安13年以降に「交州」に身を寄せていた劉巴も劉璋を頼って蜀に入り、厚遇を受け、劉備が蜀に入る際には反対している[29]。

武帝紀によれば、建安13年９月の劉琮の降伏から12月より前の間で、劉璋が役夫の徴集を受け入れ、曹操軍に兵を派遣している。また、劉璋伝によると、曹操が荊州を征伐すると聞くと[30]、劉璋は陰溥を使者として曹操のもとに派遣し、曹操は劉璋を振威將軍としている。これは当然ながら曹操の北方平定と荊州への南下という天下平定への動きが益州情勢にとって身近なものとなったからであろう。

劉璋はさらに別駕従事で張肅（蜀郡の人で、張松の兄）を派遣し、叟兵三百人と進物を曹操に送り、曹操は張肅を廣漢太守としている[31]。これで荊州を平定しようとした曹操に対する恭順の意を示したということになり、荊州平定前の曹操も劉璋の使者を丁重に扱っている。

しかし、劉璋が今度は別駕の張松を曹操のもとに派遣すると、すでに曹操は荊州を平定して劉備を逃走させていたことから、張松をまともに扱わなかったため、張松は曹操を怨んだとされる[32]。基本的に『三國志』の典拠の一つと考えられる王沈『魏書』には劉備を持ち上げる傾向がある[33]ことから、曹操の張松への態度の原因として劉備が逃走していたことを理由として挙げているが、この時点では天下平定に向けて、劉璋を力でねじ伏せることも視野に入れていたためという可能性もあるだろう。

ところが、実際には曹操は赤壁からの撤退に追い込まれ、荊州も一部しか領有できなかった。劉璋伝本文の通りであれば、結果論ではあるが、劉璋からの使者・張松に対して曹操は早まった「対応」をしたということになる。

劉璋のもとに帰還した張松は曹操を貶めて絶縁を薦め、劉備との連携を進言した。劉璋はそれを受けて法正を劉備のもとに派遣した上に、孟達を副将として兵数千とともに送って劉備を援助し、法正は帰還してきた。

この頃のことと見られるが、周瑜伝によると、劉璋が張魯の侵攻を受けていたことから、周瑜が孫瑜とともに蜀を攻めることの承認（その後は馬超と同盟）を孫権に求めており、魯粛伝にも劉璋の統治が体を成していないことから周瑜と甘寧が蜀を奪うように孫権に進言したとある。同様に、先主伝裴注所引『献帝春秋』でも、孫権から劉備への手紙で「張魯が曹操の耳目となって益州を狙っているが、劉璋は武力がないので自力で守れず、曹操が益州を得たら荊州が危ないので、劉璋攻略と張魯討伐を」という趣旨を述べており、実際に呂岱が漢中に向かおうとしていた。

ただ、この魯粛伝では、孫権が劉備に意見を求めたところ、劉備は自分が蜀を取ろうとしていたので、攻撃不可を進言し、その後自身で出撃。孫権は劉備のことを「猾虜」などと述べたとされる。

また、曹操が荊州に侵入したときに、李厳は荊州から益州に逃げ込み、劉璋から成都の令に任命されている。

その後、張松が劉璋に対して「龐羲や李異などの諸将が功を恃んで驕り、外部とつながろうとしているので、劉備を味方にできなければ、外からも内からも攻められて必ず敗れる」と述べると、劉璋はそれに従い、法正を派遣して劉備を招こうとしたとされる。これによれば、劉璋は趙韙の叛乱に関連していた龐羲（非益州人士）や李異（益州人士の可能性が高い）などに疑心暗鬼の状態でいたことになるが、それでも目立った内紛はなかったということにもなる。

劉備を招いた原因として、先主伝や『後漢書』劉焉伝附劉璋伝、『華陽國志』公孫述劉二牧志では、劉璋は曹操が司隷校尉・鍾繇を派遣して張魯を討とうしていると聞いて懼れたためとされる。

許靖伝裴注所引『益州耆舊伝』には、馬超の時代になってから、韓遂が劉璋に手紙を送り連合しようとしたが、劉璋は拒絶したとある。しかし、武帝紀裴注所引『獻帝傳』に引用された曹操を魏王に任命する詔勅には

　　獻帝傳載詔曰：「……韓遂、宋建，南結巴、蜀，……。」

とあり、馬騰・馬超らと協力することもあった韓遂や河首平漢王と自称し枹罕を拠点に30年以上割拠した宋建が「巴蜀」と結んでいたとされる。

拙著『三國志―正史と小説の狭間』〔以下、「拙著１」と略す〕（白帝社　2006年初版、2009年第２版）でも指摘したように、『華陽國志』蜀志には

汶山郡……西接涼州酒泉，……。

とあり、「西は涼州酒泉と接する」と記されている。直接接しているようには思えない汶山郡と酒泉を「接する」と表現していることからすれば、羌や氐を介して青海方面などを経由し、河西回廊へとつながっていった交流路を考えることができるが、この交流路は中国の研究者が「川西民族走廊」と呼ぶルートの一つで、汶山郡から現在の甘粛・青海方面に抜ける「岷江上流走廊」でもある[34]。

また、張既伝裴注所引『典略』には、

韓遂在湟中，其壻閻行欲殺遂以降，夜攻遂，不下。遂歎息曰：「丈夫困厄，禍起婚姻乎！」謂英曰：「今親戚離叛，人衆轉少，當從羌中西南詣蜀耳。」（後略）

とあり、韓遂が婿の閻行の攻撃を受けた際に、羌中から西南に向かって蜀に赴くことを考えていたことがわかるが、このルートは「岷江上流走廊」である可能性が高い。

この『典略』の直前に引用された『魏略』に

成公英，金城人也。中平末，隨韓約爲腹心。建安中，約從華陰破走，還湟中，部黨散去，唯英獨從。

とあり、韓遂（韓約）が建安16年に華陰（の近くの潼關）[35] から敗れて湟中に還ったとされることから、この『典略』に記された蜀に赴くことを考えていた時期が建安16年以降のことと思われ、韓遂が頼ろうとした相手が劉璋であった可能性がある。

ここまで述べたことを踏まえた上で、先に引用した武帝紀裴注所引『獻帝伝』にある建安21年の詔勅における「巴蜀」が指す政権について考えると、先述した劉焉と馬騰・韓遂らによる長安攻撃未遂の件や韓遂が力を失い宋建が滅ぼされたのが建安19年である[36] ことを踏まえると、同じ建安19年の秋に益州を奪取した劉備の政権よりは劉璋政権であったと考える方が自然であろう。

また、『後漢書』南蛮西南夷列伝や西羌伝によれば、益州内外に西羌・青羌な

どの非漢族の影響が及んでいたことがわかるだけでなく、少し後の三国時代のことになるが、益州汶山郡の羌が叛乱している（馬忠傳）ことなどを踏まえれば、益州に羌が存在していたことがわかる。ここまで述べたことを踏まえれば、劉璋政権は羌や青羌、板楯蛮などの益州内外の非漢族勢力の影響を受け、ある時は兵などとして活用していたことがわかる。

このようなことを踏まえると、劉璋政権と羌族などを配下に収めていたであろう韓遂・宋建との連携の可能性は否定しきれず、少なくとも連絡をとることのできるルートがあったことは確かである。

ただ、劉焉はともかく、張魯などとの周辺勢力との緊張関係や内部の問題を抱える劉璋が韓遂・宋建と結んで益州の外に向けて進出することを考えていたと見られる史料は管見の限り存在せず、先述のようにむしろ韓遂からの誘いを断ったとする史料もあることから、少なくとも結果的に劉璋政権が益州から対外進出を図った形跡はないことを留意しておきたい。

さらに先主伝では張松が曹操と張魯が手を組んで蜀を取ろうとすることを警戒しつつ、劉備に張魯を攻撃させ併呑して曹操に対抗しようとの策を述べて、劉備受け入れを進言していた。

実際には、法正伝にあるように、劉璋の統治に不満を持った張松（蜀郡の人）や建安年間の初め頃に益州に逃げ込んできたものの重用されなかった法正（扶風郡郿県の人）が、劉璋の抱く曹操への恐怖心を利用して劉備を益州に引き入れ、劉璋の代わりに君主として戴こうという策謀であった。

この際、黄権や王累は諫めたが劉璋は聞かず、建安16年に劉璋は数万人を率いてきた劉備と涪で会談し、さらに三万人余りの兵を増やすなどの援助をして、白水の軍を指揮させて張魯を討伐させることにした。白水関は古くから南北交通の要衝であり、漢代は甸氐道の治所であったことなどから、漢族と少数民族の接点であったとされる[37]。

先主伝によれば、この際に張松は法正を通して劉備に劉璋を襲うように進言させ、龐統も同じ進言をしたが、劉備は「慌ててはいけない」として実行しなかったとある。『後漢書』劉焉伝には劉璋襲撃を進言した人物として張松の名の

みが記され、劉備はそれに忍びなかったため、実行しなかったとされている。

その後、先主伝によると、劉備が葭萌に至るも張魯と戦うことはなく、人心を収めようとしたとされるが、劉璋伝によれば、劉備が葭萌についたのは翌年（建安17年）と見ることもできる記述となっている。

この劉備の入蜀の直前のことと思われるが、彭**羕**は人々から誹謗され、それを受けた劉璋は彭**羕**を髡鉗の刑にし、労役囚としている[38]。

建安17年、曹操が孫権を攻撃し、孫権が劉備に救援を求めてきたことから、劉備は撤退しようとした上に、劉璋から万を超える兵や物資を求め、劉璋も兵四千と求めてきた量の半分の物資を与えたとされる[39]。張魯とまともに戦わなかった劉備にこれだけの“配慮”をした背景には、劉備を当てにしつつ懼れていたという側面もあったのだろう。

張松は劉備と法正に手紙を送り翻意を促そうとしたが、それを知った兄の張松の兄・張肅が巻き込まれることを懼れ劉璋に告発すると、張松は殺され、劉備と劉璋が不和になった。

ここに至って劉備は劉璋を討ち益州を奪うことを決断し、劉璋の白水軍の督・楊懷を斬って白水関の諸将・士卒の妻子を人質として配下にし、涪を攻撃した。劉璋は劉**璝**、冷苞、張任、鄧賢らを涪に派遣して防がせたが敗北し、緜竹に退いた。この際、劉備は霍峻を葭萌に留めたが、霍峻は張魯からの降伏の誘いも断り、劉璋の武将からの攻撃も１年ほど耐え忍んだ。益州の混乱を受けて張魯も動き、劉璋も劉備の背後をおさえる人物への攻撃を行っていたのである。

劉璋は緜竹の督として李厳を派遣し防がせたが、李厳は劉備に降伏した。ここで荊州に残っていた諸葛亮・張飛・趙雲らが長江を遡り、白帝・江州・江陽を平定した。劉備は劉璋の子・劉循が守る雒を包囲するが、一年以上攻めあぐねている間に龐統が戦死している。建安19年夏に雒を落とした劉備が諸葛亮・張飛・趙雲らと成都で合流し、数十日にわたって包囲すると、成都では鄭度が劉璋に焦土戦術を進言した。劉備はその策を嫌がり、法正に諮問すると、劉璋は採用できないと述べ、実際に劉璋は「民を安んじて敵を退けることは聞いても、民を動かして敵を避けることは聞いたことがない」として退けた。さらに、

法正から劉璋に降伏を薦める手紙も送られる中、許靖が成都の城壁を越えて劉備軍側に行こうとして捕まったが、劉璋は処刑できなかった。

馬超伝裴注所引『典略』によれば、張魯に愛想をつかした馬超は劉備が成都の劉璋を包囲したと聞き、武都から氐族の居住地に逃れ、それから蜀に入り成都にやってきて劉備に降伏して成都の北に駐屯した。

その直後、劉璋の使者として張裔が劉備のもとに派遣され、主君の礼遇と臣下の安全を保障されると、劉備は劉璋が寵愛した簡雍を成都に派遣した。成都に精兵３万、１年分の穀物・布帛が備蓄されており、吏民の士気が高かったにも関わらず、「父子で20余年州にいたが、恩徳を加えることができず、３年の戦いで民を苦しめた」として劉璋が劉備に降伏。益州の人々は涙を流したとされる。

劉備が領益州牧となり、諸葛亮が軍師将軍に、法正が「謀主」となり、劉璋は荊州の公安に送られ、財物や振威將軍の印綬は帰された[40)]。

このような劉璋政権の滅亡について、渡邉義浩氏などの諸氏は東州兵を抑えられない劉璋の時代になると益州豪族との軋轢が表面化していたため、益州の豪族たちや非益州人士の大部分は秩序を確立できる人物として劉備に期待していたと考え、実際劉備に激しく抵抗したのは、劉備が主となると政権に優遇されなくなる東州兵や益州の在地社会に勢力を持たない人々だけだと考えている[41)]。

確かに、趙韙の叛乱のような劉璋政権と益州人士との間の軋轢が存在していたが、その趙韙の叛乱鎮圧以降に混乱した記述がない。劉璋が渉頭津へ東州人を住まわせ、東州頭と改名した[42)]ことを踏まえれば、劉璋政権は交通上の要地を東州兵でおさえつつ、統御することに成功した上に、益州人士も非益州人士も政権に参加させて、ある程度安定した政権運営を行っていたようにも見える[43)]。ちなみに、劉焉・劉璋政権の軍事的基盤として、東州兵だけではなく、青羌兵もいたことは指摘しておきたい[44)]。

さらに、劉備の入蜀に反対した人物や最後まで抵抗した人物の中に、益州の

中でも有力であったと見られる厳顔や黄権がいたことに加えて、劉璋政権の抵抗が激しかったために劉備が益州を平定するまでに３年かかったことは、劉璋政権がそれなりに安定していた傍証とも思われる。

このように見ると、劉璋政権に従っていた益州の有力者や一定の名声を有する人々が劉備政権を受け入れていった要因としては、過去の東州兵の横暴などによる劉璋政権への失望もあっただろうが、それよりも、益州人士・非益州人士に関わらず、益州の権力者との人間関係をリセットして力を握ろうとした人々や結果として「弱肉強食」の論理に従った人々がおり、劉備政権もそのような人々を政権に参画させて益州支配を安定させただけのことではないかとも思われる。

また、『後漢書』南蛮西南夷列伝などにも記載されるように、益州における一定の勢力を有する非漢族が存在して（おり、おそらく一部には劉璋政権に仕えていた者も）いたことも考慮すると、そもそも益州人士と非益州人士それぞれのまとまりが緩やかなものであったことが想定される。実際、益州人士の趙韙の叛乱の原因の一つは非益州人士である龐羲と劉璋との関係悪化であったし、劉備を招き入れる契機の一つも劉璋が龐羲（非益州人士）や李異（益州人士？）といった有力者を警戒したためであり、劉備入蜀の策謀を巡らしたのも張松（益州人士）や法正（非益州人士）であった。このようなことを踏まえると、劉璋政権における叛乱や混乱の原因は東州兵の横暴だけが原因ではなく、益州出身か、非益州出身かを問わず、劉璋政権との関係が悪化した人々との軋轢が原因であるように見受けられるのである。

孫権が関羽を殺害し荊州を奪取すると、孫権は劉璋を益州牧とし、秭歸に駐屯させた[45]。劉璋伝には

　　璋卒，南中豪率雍闓據益郡反，附於呉。

とあり、雍闓が乱を起こして呉に味方したのは劉璋が亡くなったことがきっかけのようにも読めるが、董和による南中統治が良好であった[46]ことも影響しているかと思われる。その後、孫権は劉璋の子・劉闡を益州刺史として交州と益

州の境界付近に居させているが、少なくとも雍闓は劉備が益州の主であることを否定し、（以前の益州牧で、呉のもとでも益州牧となっていた）劉璋、そしてその子の劉闡が益州の主であるということを乱の建前としていた可能性がある[47]。

2．『三國志』及び裴松之注所引書籍における劉璋評

ここで『三國志』及び裴注所引書籍における劉璋の評価を整理し、ここまでで確認してきた劉璋の事績と比較しながら分析してみたい。

諸葛亮…若劉景升、季玉父子，歳歳赦宥，何益於治！（後主伝裴注所引『華陽國志』）
益州險塞，沃野千里，天府之土，高祖因之以成帝業。劉璋闇弱，張魯在北，民殷國富而不知存恤，智能之士思得明君。（諸葛亮伝本文）
亮答曰；「……劉璋暗弱，自焉已來有累世之恩，文法羈縻，互相承奉，德政不擧，威刑不肅。蜀土人士，專權自恣，君臣之道，漸以陵替；寵之以位，位極則賤，順之以恩，恩竭則慢。……」（諸葛亮伝所引『蜀記』）

彭**羕**……**羕**於獄中與諸葛亮書曰：「僕昔有事於諸侯，以爲曹操暴虐，孫權無道，振威闇弱，其惟主公有霸王之器，可與興業致治，故乃翻然有輕擧之志。……」（彭**羕**伝本文）

孫権……孫權欲與備共取蜀，遣使報備曰：「米賊張魯居王巴、漢，爲曹操耳目，規圖益州。劉璋不武，不能自守。若操得蜀，則荊州危矣。今欲先攻取璋，進討張魯，首尾相連，一統呉、楚，雖有十操，無所憂也。」（先主伝裴注所引『獻帝春秋』）

周瑜・甘寧（陳寿）
……先是，益州牧劉璋綱維頽弛，周瑜、甘寧並勸權取蜀，權以咨備，備内欲自規，仍僞報曰：「備與璋託爲宗室，冀憑英靈，以匡漢朝。……」（魯肅伝本文）

※陳寿…評曰：昔魏豹聞許負之言則納薄姬於室，劉歆見圖讖之文則名字改易，終於不免其身，而慶鍾二主。此則神明不可虚要，天命不可妄冀，必然

之驗也。……璋才非人雄，而據土亂世，負乘致寇，自然之理，其見奪取，非不幸也。（巻三十一評）

※張璠…劉璋愚弱而守善言，斯亦宋襄公、徐偃王之徒，未為無道之主也。張松、法正，雖有君臣之義不正，然固以委名附質，進不顯陳事勢，若韓嵩、（劉光）〔劉先〕之説劉表，退不告絶奔亡，若陳平、韓信之去項羽，而兩端攜貳，爲謀不忠，罪之次也。（劉二牧伝評裴注〔『後漢紀』？〕）

このように見ると、『三國志』及び裴注での劉璋に対する評価が少ないことに加えて、「暗弱（闇弱）」などといった低評価しかないことがわかる。さらに、『三國志』魏書（以下、『魏志』と略す）では劉璋に関する評価の記載がなく、『三國志』蜀書・呉書（以下、『蜀志』・『呉志』と略す）で劉璋を評価しているのは諸葛亮・孫権・周瑜・甘寧といった劉璋政権を征服することを目指していた人物であることにも注意が必要である。

裴注を含む『蜀志』では、まず後主伝裴注所引『華陽國志』にある諸葛亮の指摘がある。拙稿１でも指摘したが、この記述は評価を含むものの、毎年大赦をしていたという事実の指摘であり、劉璋の大赦の回数について現時点では史料批判できないため、とりあえず信ずるほかない。ちなみに、『華陽國志』公孫述劉二牧志の譔も基本的には陳寿の評価を基にして評されている。

また、諸葛亮伝の所謂「隆中対」での評価であるが、「隆中対」は劉備と諸葛亮の二人の間だけで語られた内容であり、出所はこの二人のいずれかになることにも注意が必要であろう。それまで方向性の定まらなかった劉備集団が、「隆中対」の方針通りに発展したことからすれば、出会った際に諸葛亮からこれと同様の進言はあったとも考えられる。ただ、『三國志』の中でも蜀漢出身である陳寿本人の影響が色濃く反映されていると見られる『蜀志』のように蜀漢政権に都合の悪い内容が出にくい史料の中での人物評価について考える際には、慎重にならざるを得ない。

加えて、拙稿１や拙著１で述べたように、歴史書『三國志』の中で「曹操のライバルは劉備」と位置づけられていることからすると、劉璋の評価は劉備の

評価と密接に関係してくることにも注意が必要である。「曹操のライバルである劉備」を強調して高く評価したいのであれば、「曹操・劉備以外の人物」である劉璋について高い評価をする必要がないからである。このように考えれば、「隆中対」での劉璋評をそのまま受け入れることはできないだろう。

諸葛亮伝裴注所引『蜀記』の記述については、『蜀記』の著者・王隠が東晋初の人物であり、『三國志』本文や『三國志』のもとになった史書の記述などをもとにして著されたと思われることや裴松之からも史料批判されている[47]ことに留意する必要があろう。

彭**兼**伝にある彭**兼**から諸葛亮への手紙は、劉璋政権崩壊後に劉備政権に仕えた彭**兼**が劉備批判をして獄に下され、そこから諸葛亮に送った謝罪と弁明の手紙の中での劉璋評であり、他の君主より素晴らしい劉備の恩愛について述べている箇所であることを踏まえると、これもそのまま受け取ることはできないだろう。

『三國志』巻三十一評での陳寿の劉璋評も、「人雄に非ず」という厳しい評価が下されているが、これも劉備による益州征服を正当化するために劉璋政権の負の側面を述べるという一面があったと見られる。

裴注を含む『呉志』を見ると、魯粛伝本文の記事では劉璋政権が「綱維頽弛」であるのを前提として周瑜・甘寧が蜀を取ることを進言しているが、『呉志』のもととなった韋昭『呉書』には後漢の後を継いだ国家としての呉国の正統性と呉国が近い将来全土を統一するという一種の「予定調和説」を主張する性格があることなど[48]からすると、『呉志』の人物評価も簡単には鵜呑みにできないことに注意が必要である。

呉主伝裴注所引『獻帝春秋』でも、劉璋政権の防衛力について疑義が呈されているが、先述のように『獻帝春秋』は裴松之も信憑性を疑うほどの史書であることに留意しておかなければならないだろう。

このように見ると、『三國志』及び裴注所引書籍の劉璋評は、簡単には信用しがたいものであり、少なくとも注意が必要であることがわかる。

加えて、『後漢書』、司馬彪『続漢書』の志、『八家後漢書輯注』[49]、袁宏『後漢紀』[50] における劉璋評についても確認すると、『三國志』及び裴注の内容と重なっていないものとしては、管見の限り『後漢書』劉焉伝の論以外にはないが、その論の記述は非常に興味深い。

……璋能閉隘養力，守案先圖，尚可與歳時推移，而遽輸利器，靜受流斥，所謂羊質虎皮，見豺則恐，吁哉！

ここでは、「劉璋が隘を閉じ、力を蓄えて劉焉の方針を守ろうとしたが、時が推移しているにも関わらず、にわかに賞罰の大権を行使しようとして排除された」と考えられており、「虎の皮を被った羊」とも表現されている。この論を読むと、孤立しつつ領域守備に努めた人物ということになるが、少なくとも「闇弱」などとは表現されていないことを指摘しておきたい。

以上のように様々な劉璋評があるが、意外と正確なところを突いているのは『後漢書』の評だと思われる。曹操が「微弱」であった初平・興平年間、建安元年～４年の間には、劉璋も益州を安定させることができず、その後も内憂外患や配下への疑心暗鬼に苦しみながら、それなりに内政を安定させた劉璋は確かに益州に籠った守勢の人物であった。

おわりに

『三國志』及び裴注、『後漢書』などから劉璋政権の年代記を作成してみると、守勢の政権であったことは間違いないが、少なくとも単なる優柔不断の人物でもなかった実像が浮かび上がってくる。建安５年頃までは劉表との争いや叛乱に苦しみながら益州掌握に努め、その後は張魯との争いに苦しみつつ、曹操・劉表などとの外交戦を繰り広げている。

建安５年以降、張魯と争う巴郡を除いて叛乱はなく、益州内部の統治を安定させていったとみられる。中平年間以降の益州の混乱を考慮すれば、益州の豪族や東州兵・青羌兵に依存するところが大きかったとはいえ、配下の有力者を益州人士・非益州人士に関係なく警戒しながらの劉璋及び劉璋政権の統治は「闇弱」と言われるほどではないと思われる。史料上の問題があり、困難が伴うだ

ろうが、今後、劉璋政権について考える際には、益州人士・非益州人士という構図のみならず、益州の非漢族の動向にも更なる注意が必要であろう。

官渡の戦いでの曹操の圧勝と河北制圧の結果、曹操政権の優位が確立されていく状況の中で、孫権や劉表・劉備の動きも睨みつつ、張魯との戦いに苦しみながら益州を統治しており、最終的には目の前の張魯の脅威と曹操の影に苦しむ中で迎え入れた劉備の勢力に呑み込まれていったということになる。

『三國志』などの史書を見ると、劉璋への前向きな評価が非常に少なく、為すすべなく益州に籠り坐して敗れたというイメージを抱かせるような内容ばかりである。これは、評価しているのが劉璋政権を倒した劉備政権側の人物や益州を狙おうとした孫氏政権の人物しかいないことや、陳寿『三國志』や王沈『魏書』に曹操の「お気に入りのライバル」・劉備の評価を高める傾向があることや『呉志』のもととなった韋昭『呉書』が孫呉政権に都合のよい記述をすることなどから、劉璋の評価が意図的に低くされてしまったためであると考えている。そのような劉璋（政権）評の中で、筆者が意外と正確なところを突いていると感じるのは、『後漢書』列伝巻六十五劉焉伝の論である。

漢魏交替期の益州から当時の動きを整理すると、長安方面や河西回廊との連携を見てとることができる。益州をはじめとする各地域を中心とした漢魏交替期の政治的・文化的動向を、出土資料・文献史料を批判的に用いながら網羅的に整理し明らかにしていくことを今後の課題としたい。

注

1）『華陽國志』巻六劉先主志にも同様の記述がある。

2）漢魏交替期の益州についての代表的な先行研究としては、狩野直禎「蜀漢国前史」（『東方學』16　1958年）・「後漢末の世相と巴蜀の動向」〔以下、「狩野直禎前掲論文」と略す〕（『東洋史研究』15－3　1967年）・「後漢末地方豪族の動向―地方分権化と豪族―」（中国中世史研究会〔編〕『中国中世史研究』東海大学出版　1970年）、上田早苗「巴蜀の豪族と國家權力―陳壽とその祖先たちを中心に―」（『東洋史研究』25-4　1967年）〔以下、「上田早苗前掲論文」と略す〕、中林史朗「東漢時代に於ける益州について―『後漢書』を中心として―」（『大東文化大学漢学会誌』17　1978年、のち『中国中世四川地方史論集』（勉誠出版　2015年）所収）、渡邉義浩「蜀漢

政権の成立と益州人士」〔以下、「渡邉義浩前掲論文」と略す〕（『東洋史論』 1988年,『三国政権の構造と「名士」』 汲古書院 2004年第２章第２節・蜀漢政権の支配と益州社会）、川本芳昭「民族問題を中心としてみた魏晋期段階における四川地域の状況について」（唐代史研究会〔編〕『東アジア史における国家と地域社会』 刀水書房 1999年、のち『東アジア古代における諸民族と国家』 汲古書院 2015年所収）などが挙げられる。また、劉璋が「暗弱」ではなかったと見る研究としては、段少京・陳金風「劉璋失益州新論」（『南昌航空工業学院学報（社会科学版）』 6－1 2004年）、馬寧・石超・李金鑫「劉璋〝暗弱〟辨」（『伝承』 2008年第４期）などが挙げられる。

3）この年代については、拙稿１参照。

4）この時期については、稿を改めて考察したい。

5）拙稿１。

6）この件については、稿を改めて考察したい。

7）この段落については、董卓伝・劉焉伝、『後漢書』献帝紀及び同紀注所引袁宏『後漢紀』、『後漢書』劉焉伝参照。

8）董和伝では、劉璋のもとに董和が荊州南郡から宗族を連れて益州に遷り、劉璋に用いられたとされる。この段落については、劉焉伝・劉璋伝、『後漢書』劉焉伝参照。

9）この件については、拙稿１参照。

10）張魯政権に関する先行研究としては、大淵忍爾「後漢末五斗米道の組織について」（『東方宗教』65 1985年）、澤章敏「五斗米道政権と板楯蛮」〔以下、「澤章敏１」と略す〕（『史観』116 1987年）・「五斗米道張魯政權の性格」（『古代東アジアの社會と文化：福井重雅先生古稀・退職記念論集』 2007年）、梁中效「漢末西部政局与張魯政権」（『成都大学学報』（社会科学版） 2005年２期）孟茹茹・張喆「試論五斗米道及張魯政権」（九江学院学報（哲学社会科学版） 2010年１期）などを挙げておく。

11）劉璋伝。

12）賓人が板楯蛮であることについては、『後漢書』板楯蠻夷伝、澤章敏１など。

13）狩野直禎前掲論文など。

14）『十六国春秋輯補』蜀録一、『晋書』李特載記、澤章敏１。

15）武帝紀、拙著１。

16）ここまで述べたことを踏まえると、張魯からの離反策の影響も考えることはできるが、現時点では憶測の域を出ない。

17）舊民を侵暴していたとされる東州兵に対する“抵抗勢力”であったことや張魯との戦いという共通の利害があった可能性もある。

18）拙稿１。

19）『華陽國志』公孫述劉二牧志に東州士、あるいは東州人と呼ばれる人々のことが記され、劉璋伝裴注所引『英雄記』にも数万家も流入してきた南陽・三輔の人々を兵

士とし、「東州兵」と名付けたとされるが、この南陽・三輔の人々は、馬相の亂の余衆を中核としており、自己の部曲とし軍隊に編制したと見られる。福井重雅「漢末東州兵出自考―山東と巴蜀の文化をめぐって」(『史観』100　1979年)、渡邉義浩前掲論文など。

20) 劉表が周囲を対抗勢力に囲まれていたことについては、拙稿１参照。

21) 澤章敏１。

22) この段落については、劉璋伝、『華陽國志』公孫述劉二牧志参照。

23) 杜微・周羣・黄權も劉璋が登用している（『三國志』各伝参照)。

24) 先主伝、先主穆皇后伝。

25) 来敏伝。

26) 費禕伝。

27) 楊戲伝附『季漢輔臣賛』賛費賓伯附。

28) ここで交州に「」を附すのは、『三國志』の記載では交州とあるものの、実際の交州の成立は203年とされるためであり、以下の文章でも同様である。拙稿１。

29) 劉巴伝及び同伝裴注所引『零陵先賢傳』。

30) 『後漢書』劉焉伝では建安13年、『華陽國志』公孫述劉二牧志では建安10年のこととされているが、曹操の荊州征伐の時期から建安13年であろう。

31) 『華陽國志』公孫述劉二牧志では建安12年のこととされているが、これも曹操の荊州征伐の時期から建安13年であろう。

32) 『華陽國志』公孫述劉二牧志によると、越嶲比蘇の令としただけだったとされる。

33) 拙稿「王沈『魏書』研究」(『創価大学大学院紀要』第20集　1998年)、拙著１、拙稿１など。

34) 石碩「四川と民族走廊」(『アジア遊学』５　勉誠出版　1999年)、石碩「川西民族走廊的歴史変遷与特点」(『天府新論』　2000年Ｓ１期）等。

35) 例えば、『春秋左氏伝』文公十三年に

　春，晉侯使詹嘉處瑕，以守桃林之塞。

とあり、その杜預の注に

　桃林在弘農華陰縣東潼關。

とある。

36) 武帝紀・夏侯淵伝など。

37) 古賀登『四川と長江文明』。

38) 彭**羕**伝。

39) 先主伝。

40) 劉備の入蜀に関しては、先主伝・劉璋伝・諸葛亮伝・張飛伝・馬超伝・黄忠伝・趙雲伝・龐統伝・法正伝・許靖伝・魏延伝・李厳伝・簡雍伝・張裔伝・黄権伝などを参照。

41) 渡邉義浩前掲論文など。

42）『華陽國志』蜀志。

43）上田早苗前掲論文では、劉焉から鄧艾による蜀漢滅亡までの間で、「巴蜀土着の豪族は非土着民を排除してかれらのみによって編成される政権を樹立することはなかった」と述べられている。

44）劉焉伝裴注所引『英雄記』。

45）『華陽國志』劉先主志にも同様の記述がある。

46）董和傳。

47）張裔伝。

48）例えば、龐悳伝裴注には

王隱『蜀記』曰：鍾會平蜀，前後鼓吹，迎悳屍喪還葬鄴，冢中身首如生。

臣松之案悳死於樊城，文帝即位，又遣使至悳墓所，則其屍喪不應在蜀。此王隱之虚説也。

とある。

49）拙稿「韋昭『呉書』について」（『創価大学人文論集』16　2004年）、拙著１。

50）周天游〔輯注〕『八家後漢書輯注』（上海古籍出版社　1986年）。

51）袁宏〔撰〕周天游〔校注〕『後漢紀校注』（天津古籍出版社　1987年）。